

2011年2月1作成

Copyright © 楓出版株式会社

アイノベル

iNovel という衝撃

kaedebooks.com

iNovel という衝撃

筆者

谷口 純一

*iNovel*タイプ

電子書籍

電子書籍化 楓出版

歴史上の小説家はペンと紙で格闘してきました。タイプライターは小説家からペンを奪いキーボードを与えました。電子書籍は紙を奪ってしまふのでしょうか。では代わりに何を彼等に与えるのでしょうか？

i N o v e l という衝撃

目次

序	はじめに	5
第一章	i N o v e l とはなにか	9
第二章	なぜ i N o v e l は P D F 形式を採用したのか?	36
第三章	ケータイ小説とは?	57
第四章	スマートフォン用の電子小説とは?	86
第五章	i N o v e l の名前について	100

これは電子書籍ブームに対する一つの提案です。

二〇一一年、電子書籍の黒船と言われた iPad が登場して二年目に入りました。皆さまは、いま話題になることの多い電子書籍についてどのように感じていますか。

私たちが期待した展開になっているでしょうか？ 印刷費が掛からないから安くなるのではないか。重い本を何冊も持ち歩かなくても良くなるのではないか。電子書籍で動画や音楽が読めるのではないか。また電子書籍業界の方からも、電子書籍が魅力的な市場になるのではないか、そんな期待に胸を膨らませた声が続くつも挙がっていました。

でも現実はどうでしょうか。

値段はそれ程安くはない。せっかく買った電子書籍が他の端末では見られない。縦書きで読めない。端末にフォントが入っておらず作品の雰囲気とフォントが全然合っていない。ためにスマートフォンで電子書籍をダウンロードして読んでみたけれど、液晶画面から文章がはみ出てしまい、不便で読めたものではなかった。欲しい作品が電子書籍化されていない。読むと目が疲れる。大手出版社が何万という著作を引っ提げて iPad に参加するという噂があったけど始まってみるとそうではないようだ。

このようにして、私たちが抱いていたものと大分違うということが、電子書籍に対する正直な感想ではないでしょうか。

これから発展していく業界なのだからこれくらいの批判はあるもん

さ、という優しいご意見も皆様の中にはあるかもしれませんが。新しい業界だからさ、みんな慣れていないだけなんだよと。

でも本当にそうでしょうか。ちよつと立ち止まって考えていただきたいのです。もしそれらの批判がけつきよく私たちの我慢になるのだとしたら、それは、今後の電子書籍の発展を阻害する芽になってしまうのではないのでしょうか。

このまま本当に電子書籍業界は発進し続けてもよいのでしょうか？
電子書籍業界は、早くも舵を切り直すべき時に来ているのではないかと、そう筆者はつい考えてしまうのです。

私は出版業界の方々、印刷業界の方達、プロで活躍されていていらっしゃる著作者の方々、そして今後電子書籍の書き手になるであろうアマチュ

ア作家の方々に、そして読者となる皆様に、電子書籍業界という船の針路となるアイデアを提案したいと思っています。それは先程申し上げた電子書籍のいくつかの問題を同時に解消し、電子書籍業界の発展を加速させるであろう、ある一つの簡単な方法です。私はそのアイデアを『i^{アイノベル}Novel』と名付けました。ここにそのアイデアを皆様に託し、そして皆様からご意見を伺えたらと思っています。

第一章 iNovelとはなにか

本題に入ります。

iNovelとは、一言で言ってしまうと、スマートフォン用に作られた電子小説、ということになります。もう少し正確に述べるのであれば、それはPDFファイルフォーマットを採用したスマートフォンや携帯電話などの小型端末で読まれることを想定した電子小説全体のことをさします。

PDFファイルをしましたから、レイアウトは固定されます。小さな画面では文字は小さく、大きな画面では大きく映し出されるのが特徴で、一ページの中で文字の大きさや一行の文字数といったレイアウトを変え

ることは出来ません。

また使用端末としてスマートフォンや携帯電話を想定して作成しましたから、PCやiPadや、Kindleのような大きな電子書籍端末で読むには不向きなのではないかとすでに勘繰っておられる方がいらっしゃるかもしれません。

しかしこのPDFファイルを採用したことと、携帯電話やスマートフォン向けに限定した問題は、のちほど詳しく説明させていただきますが、このことがiNovelにとって欠かすことのできない要素であることを徐々にご理解いただけるのではないかと、同時にiNovelの本当の魅力を皆様にお伝えできると筆者は考えております。

S — iNovelが想定するターゲットユーザーの規模 —

iNovelの魅力、それは端末やファイルフォーマットによって利用者を選ばないこと、つまりターゲットユーザーの多さです。

携帯電話、PC、電子書籍リーダー、スマートフォンなどもっとも多くの端末で採用されている電子書籍フォーマットはいまでもなくPDFファイルです。

そしてiNovelがその中でも主とするターゲットユーザーは携帯電話とスマートフォンの利用者になります。この携帯電話およびPHSの日本における全体の契約数は二〇〇九年度で一億二千万人に達しています。また携帯電話を利用するのiモードやEZ|WEB、Yahoo

ケータイなどインターネット契約者数も九千六百万人に達し、まもなく一億人を突破する勢いです。

これはスマートフォン契約者数を含む数字です。

キャリア別ではドコモを筆頭にKDDI、SoftBank、イーモバイルと続きますが、当然それらの契約者数は、先程の一億二千万に含まれ、また日本に電子書籍用のプラットフォームを敷くiPhoneやiPadを擁するアップルの端末を利用するユーザー数を遙かに上回る数字であるということは言うまでもありません。

スマートフォンや携帯電話ユーザーをターゲットとする意味をこれでご理解いただけたのではないかと思います。

i N o v e l の二つ目の魅力は導入が簡単であるということです。

これは、作品を供給する出版社にとって大きなメリットとなります。

i N o v e l は P D F ファイルを使用します。編集業務に携わる人で P D F ファイルを使用したことのない方はいないでしょう。印刷所への入稿にも使われるファイルフォーマットですからこれまでの作業スタイルを変える必要がなくなります。e P u b のように新たな難しい知識を獲得する必要がないことは、忙しい出版業界の方にとって歓迎すべきことではないでしょうか。

iNovelの三つ目の魅力は将来性です。十年後、いえ五年後の日本における電子書籍端末の主流となるものに、筆者はスマートフォンを位置付けています。携帯電話はより高機能になりつつありますが、その最終形態はなにかと考えたとき、それはスマートフォンが示す路線以外に筆者には考えられませんでした。

筆者はこの電子書籍ブームが、もたらす意味は大きいと思います。書籍分野でのペーパーレス化のきっかけになると考えていますし、書籍と電子書籍業界はノウハウをまったく異にしながらも徐々にこれから融合していくだろうと考えています。やがて両者は売り方も書き方もまった

く違うノウハウを持ちながら、作家は電子書籍と書籍の二つの領域を行き来するようになっていくかもしれない。出版社は人材の流出を防ぐためにいち早く自前で電子書籍のノウハウを吸収しようとするでしょうし、一方電子書籍業界は、今まで出版業界が蓄えていた書き手やコンテンツや参入をより促すような様々な展開を推し進めていくことになるでしょう。

ここで端末に目を向けてみます。電子書籍を牽引していく端末は判でしょうか？ 筆者はiPadやKindleのような大型の端末ではなく携帯電話やスマートフォンのような小型端末であると考えています。

私たちは、大きなものよりも小さなもの、また単機能よりも多機能、そして高品質なものを選択してきました。もし携帯電話やスマートフォン

ンが電子書籍閲覧機能をスムーズに取り込めるのなら、その流れを止めることはできないでしょう。すでに多くの携帯電話は機能的に可能な段階にまで来ているのではないのでしょうか。そうPDF閲覧機能がそれにあたりません。この機能を積極的に活用することによって電子書籍の爆発的な普及がはじまると筆者は考えております。

§ — i N o v e l は誰でも名乗ることが可能 —

筆者はi N o v e l という電子書籍のスタイルが多くの方に受け入れていただきたいと考えております。読者となる方だけではなく、作り手であり供給側でもある出版社の方にもこの考えに賛同していただきたい

と願っています。

しかしiNovelの導入には困難な作業が待っているのではないかとお考えの方はいらっしやるかもしれません。筆者はこれからiNovelの魅力である導入が簡単であるという点について更に詳しく述べてみようと思います。きっと皆様はそのコンセプトが簡単なものであることに驚かれるはずです。

iNovelを作成するのに必要なのは、組版処理を行うindexのソフトを扱うスキルです。当然ですがこれは出版業界、印刷業界の方なら標準で持っているであろうスキルであることは言うまでもありません。

そして小説とPDFファイルとスマートフォンを上手くつなぎ合わせ

るポイントさえ知っていれば i N o v e l 形式の電子書籍は簡単に出来る上がります。

まず三者を何も考えずにつなぎ合わせると、実際どういうことが起るのか見てみましょう。

携帯電話で P D F ファイルを読み込んで全体を表示すると文字が小さくなりすぎてしまいよく読めない。では文字を拡大して読んだ場合、今度は文章が切れてしまう。1 ページを読み切るのにスクロールや拡大縮小を何度も繰り返して、やっと読み終えることができる。

つまり私たちににとって快適な読書とは程遠いものが待っていたのです。これを体験してしまったために P D F は電子書籍に向かないと考える方は少なくありません。たしかに i P a d であれば画面を広く扱えま

すので、そういった問題は起きる心配がありません（それが大型端末が求められた理由でした）つまり需要がありながらも携帯電話やスマートフォンに合わせてPDFはいままで作成されることは今までなかったのです。

しかし時代は携帯電話やノートPCを持ち歩く時代からスマートフォンに移り変わろうとしています。

筆者はこれらの問題点をうまく解決するにはどうすればいいかを考えました。原因が分かっているのであればそれを直せばいいだけです。

iNovel作成のポイントは三つです。たった三つのポイントを押さえることでiNovelは作れてしまうのです。ではその三つをご紹介します。

1 PDFファイルで縦型の判型を使用し縦書きであること

まず筆者は単純にターゲットユーザーを絞ってしまいレイアウトをそれに合わせたものに行うと考えます。電子書籍といっても様々な端末が用意されています。PCやiPadやその他の電子書籍端末、携帯電話、スマートフォン、他にもゲーム機や電子辞書など様々な端末が電子書籍の候補に挙げられました。

筆者が選んだのは携帯電話やスマートフォンのような小さな端末でした。これは先程申し上げたターゲットユーザーの規模を基準に選んだものなのですが、驚いたことに携帯電話やスマートフォンのように小さな画面に合わせることで逆にiPadやKindleなどどんな画面でも

可読性を損なわず表示されることを発見したのです。携帯電話や、スマートフォントフオンの画面のほとんどが縦型だということに着目したのはその後のことでした。そして筆者はこのときにスマートフォンと縦書きの調和性を発見します。（ちなみに筆者は四六判の判型を使用しています）

2 組版時の上下左右の余白を少なくする

雑誌や単行本には必ず上下左右に余白マージンがあります。余白のホワイトの部分を増やし印象を柔らかくする効果や、また書き込みを促すなど余白には意味があつたのですが、しかし電子書籍ではあまり意味のないものであることに気付きます。画面に直接ペンで書き込み出来るわけではあ

りませんし、印象を変化させるのはインターフェイスである端末のフレームがその役割を担うものだからです。それに小さな画面ですと、余白の分だけ情報量が減り、それは長い文章を読むには不効率になってしまいます。小さな画面で文章を読む際に求められることは、一ページ内の情報量をどれだけ増やせるか、そして読みやすさの両立にあります。そこで筆者は思い切って電子書籍では不要な余白を削ることにいたしました。これによってピンチ作業による拡大縮小の手間を大幅に省けることができますようになります。(なお筆者は四六判サイズの上下左右に十ミリだけ余白をとっています)

3 携帯電話でも読みやすい一行の文字数、文字の大きさにすること。

あとは先程の読みやすさと情報量の多さの中でバランスを見ながら文字数や大きさを調整するだけです。一ページあたりの情報量の維持と、読みやすさ、バランスを追求していくと徐々に最適なものが出来上がっていったのです（筆者は、四六判の判型で三十一文字、十一列、二十一級の大きさの明朝体を使用しています）

単純に言ってしまうえば、これだけでiNovelは出来上がります。PDFでも携帯電話やスマートフォンで読みやすい電子書籍が出来上が

るのです。

他にもノンブルの位置を中央にしたり、フォントの種類を少なくしたり全ページモノクロにしたりと、データ容量をウェブ用に軽量化に つとめたりするなどスマートフォンで快適に読むための細かな工夫はたしかにあります。しかしこれだけの条件を満たして筆者はiNovelと呼称していただききたいと思っております。そして皆様にもこれらの条件をみたした電子書籍小説を作成されたとき、iNovelと称していただければと思っ ているのです。

おそらく今これを読んでいる皆様の中で『どうしてそんな簡単にノウハウを教えてしまうのだろうか』と驚かれた方は多いのではないでしょうか。

もう一方では『なんてくだらないんだ。今時PDFなんて時代に逆行している』と一笑にふされる方の声も聞こえてくるようです。

筆者はどちらももつともな意見だと思えます。しかし忌憚きたんなく申し上げるならばそれらは誤解と固定観念に縛られた考え方であると筆者は感じます。

一つ目にあたる『どうして簡単にノウハウを教えてしまうのだ』とい

う疑問についてお答えします。

筆者はこのアイデアを広める前にある業界に横たわる一つの思想に目を向けていました。それはオープンソースという発想です。インターネットやソフトウェア分野ではたびたび耳にする言葉かもしれません。一つの技術を開発してもその知識や技術を独占せずに、その技術を公開し自由に使うてもらふことでその分野の発展を促進させていこうという試みをオープンソースと読んでいます。これはアドビシステムズが現にPDFファイル規格で行っていることで、様々なサードパーティと言われるプラグインが開発および販売されており、たとえば私たちはアドビの製品以外の製品でもPDFを扱えることができる場面に出会ったことはないでしょうか。こういった他社の技術を利用してさらに商業利用するこ

とがIT業界ではよく行われており、ウェブ上でもHTMLやCSSの知識に限らず様々な知識が検索の上位に出てきてその知識を活用することが出来ます。

話は少し変わりますが筆者は今の電子書籍業界に必要なことはこの足並みを揃えることなのではないかと思っています。

今の電子書籍業界は混乱の火中と言っていいでしょう。電子書籍業界、出版業界、携帯電話業界、家電業界、WEB業界がばらばらに動いていて一目で理解するのが非常に困難な状況です。これこそが現在の電子書籍ブームの異様さを表しているといっても過言ではありません。電子書籍業界は勃興したばかりであり、誰もが新規参入業者なのですから、進出前の業界にあったような力関係は通用しません。戦国時代にタイムス

リップしたみたいに各々が闇雲に己の勢力圏を拡大しようとしているようにも見えなくもないでしょう。

でも筆者は考えてしまうのです。この中に本当に読者のことを考えている人はどれだけいるのかと。また電子書籍業界のコンテンツ提供者の立場である著作者の方々のことを考えている方はどれくらいいるのだろうか。

ばらばらに動くと言うことは、それだけ読者の選択肢を増やします。また同時に作り手側にも闇雲に作業工程を増やすことになります。もし電子書籍時代が今よりも活発化したとき著作者は書籍で読まれることと電子書籍で読まれることと二種類の立場に置かれた読者を考えて今後、創作にあたらなければならぬのでしょうか？

これは大変不合理と言わざるをえません。

この現場の混乱に対して電子書籍業界は無関心ではないでしょうか。

現に、雨後の筍たけのこのように電子書籍サイトがオープンしていますが、同じサイトのなかでもファイルフォーマットやレイアウトがばらばらなサイトが多く、使い勝手はあまり良いとはいえません。また業界も顧客を自分のところで囲うことに必死でお互いを紹介し合うことは皆無に等しい状態で、読者は乏しい情報の中電子書籍を見つけるしかありません。プロモーションにお金を掛けたものだけが電子書籍を大量に売ることが出来る。そういう仕組みになろうとしています。これでは電子書籍は出版業界の悪弊のみを受け継ぐかたちとなります。

そうではなく作家や書評家同士がよくやるようにお互いの作品を紹介

し合えるような雰囲気を私たちはつくるべきなのではないでしょうか？
電子書籍を通して思想を共有すること、筆者のこの提案がその端になればよいと思っています。

このiNovelのアイデアが多くの人に広まり、各社がレイアウトを平準化することによって、電子書籍はより親しみやすいものになります。編集者や著作者の方々にも、紙のときと同じスタイルで創作を考へることができまますから、混乱を与えることなくこれまで通り作業に打ち込んでいただけます。

このiNovelが多くくの支持が得られるモノになり、多くの電子書籍で採用されることになれば、それは私たち全体の利益になるでしょう。電子書籍全体の需要はますます拡大するに違いありません。先程の契約

者数が示すように、決して小さな夢物語ではありません。

i N o v e l というブランド一つで、誰もが（たとえそれが一介の無名作者であっても）大きな市場で自由に参戦することが出来るのです。

もしこれを読まれた出版関係者、いえ個人の著作者の方、i N o v e l を作ってみようと思っていらっしゃる皆様にお願いしたいことがあります。もしこのようなスタイルの電子書籍小説を作られたとき、小さくつけてくださるので i N o v e l のロゴを記載していただくと大変嬉しく思っております。明朝体で「iNovel」と書き、斜体にすれば下のよう
に簡単に「iNovel」のロゴが出来上がります。そう誰でも自由に i N o v e l を作ることが出来るのです。

§ — PDFファイルは時代に逆行しているのか —

筆者は今まで i N o v e l の良い面ばかりをお伝えしてまいりました。でも信じがたいとおっしゃる方はまだまだいらっしゃるはずですよ。

それは二つ目の指摘にあった「時代に逆行している」という問題に集約されていると筆者は考えています。

時代に逆行している。なぜいまさらPDFファイルなのかと。

逆行するという言葉が示すようにPDFはたしかに古い規格です。最近できたe P u bとは違います。しかし古いからと言ってそれは悪いことなのでしょうか。古くからある規格の方がより様々な状況に対処済み

であり、信頼性が高いということになります。

PDFは一九九三年にアドビシステムズから発表され、またた瞬く間に電子文書フォーマットとして認知されていきました。あのウインドウズ95よりも前に発表された規格であることはご存じでしょうか。以来、アドビはPDFを良くするために多くの顧客の声を聞き入れ様々な問題に取り組み、問題をクリアしていきました。そしてPDFは完璧な電子文書フォーマットとして他のフォーマットを寄せ付けないほどになりました。

しかしそんなPDFにも数少ない問題があります。それはレイアウトが固定されてしまうということです。つまり端末を選んでしまうそんな側面をもっていたのです。

だから i N o v e l が P C や i P a d のような大きめの電子書籍端末で読むには不向きと感じられたのだとしたらもつともかもしれません。

でも私はたしかにスマートフォン用と謳っていますが、決して P C や i P a d で読むのは不便であるとは申し上げていないのです。

電子機器業界では、大は小を兼ねるの反対こそが常識であり、小は大を兼ねるものでなくてはなりません。ですから必ずしも大きな端末で i N o v e l が読めないというわけでは決してないのです。

P D F が閲覧できる機器であれば、i N o v e l はどの端末でも同じように読めますし、快適な読書を提供することをお約束します。文字が大きすぎるのであれば、読みやすい大きさまで小さくすればいいだけです。ほとんどの電子書籍専用端末、そして P C 用の閲覧ソフトである A

crobat Readerには見開き表示（2ページ分を同時に表示する機能）を可能にする機能がついています。これらの見開き表示機能によつて文字の大きさの問題は解消されPCやiPadやkindleでも快適な読書をすることは可能なのです。

もつともこれは論より証拠であると筆者は考えます。実際に体感していただくほかないと思っています。筆者が運営するカエデブックスサイトではiNovelの無料小説をいくつかご用意しております。それらのiNovel作品をダウンロードして読んでいただくことが一番の理解に繋がるはずだと思っておりますし、また小説ではありませんが今皆様が読んでおられるこれがiNovel形式で書かれたPDFファイル文書であり筆者の主張にご理解いただけるものと信じております。

第二章 なぜ i N o v e l は P D F 形式を採用したのか？

たしかに古いというのは言い過ぎだった。それでも新しい日本の電子書籍業界の主力フォーマットに P D F を採用するのは納得いかない。

そういった根強い声はたしかにあるのかもしれませんが。それは端的に申し上げれば e P u b を推し進めたい方達にとって筆者のアイデアはそれを阻害する要因となるからなのかもしれません。

彼等の考えはつまるところ P D F ファイルを採用したことに不安はないのかと言うことだと思います。つまり次の言葉に要約できます。レイアウトを固定化することによる不安はないのかと。e P u b には端末の大きさを考える苦労はないのですから。いま注目を浴びているのは e P

u bでありPDFではないわけですから。この不審を覆すのは簡単ではないでしょう。

i N o v e l がなぜPDFファイル形式を採用したのかについてご理解いただくためには、電子書籍のこれまでの流れを振り返りながら、私たち自身を見つめていく必要があるのかもしれない。よろしければ、これから電子書籍の歴史を繙ひもときながら、さらに新たな視点からi N o v e l の魅力について語っていきたいと思っています。長くなりますが最後までおつきあいいただければ嬉しく存じます。

今の日本の電子書籍ブームは、アメリカの電子書籍ブームが大きな波となつて太平洋を越えてやってきたものであるということは、電子書籍に関心が高い皆様にはご周知の通りでしょう。さかのぼ遡ってみれば二〇〇七年にアメリカでAmazonが電子書籍端末kindleを発売し、同時に販売するためのプラットフォームを敷き、米国内で電子書籍の提供を開始したことがそもそもその電子書籍ブームのはじまりでした。そしてその成功を目にしたアップルが電子書籍市場への参戦に名乗りを上げiPadを発売し、その勢いが日本へ波及したというのが電子書籍ブームの単純な流れとなります。

このアップルの勢いのうらには iTunes という音楽業界でのダウンロード販売ビジネスの成功があり、電子書籍分野でも同じような成功がもたらされるのではないか、アップル社は日本の出版業を乗っ取ろうとしているのではないかこれが日本で見えている電子書籍業界の最も大きな構図であり、私たちが iPad を黒船となぞらえたのはここにあります。現に手法は違いますが Amazon のオンライン書店ビジネスが完全に日本で乗っ取られてしまい同じ轍を踏むものかと出版業界は身構えています。

よもや外国企業に文化の発信地である出版業界の一つを奪われるなんてと考える人はけっして少なくありません。もし日本の文化が外国企業によって検閲されるようになったらあなたはどうか感じるでしょう。アッ

プルが電子書籍アプリで審査という検閲を行っていると誰かが指摘したのは決して言い過ぎではないと筆者は思っています。

iPad発売に関してもアップルは自社の書籍販売のプラットフォームで、書籍を販売するために三割の手数料を要求しています。

これに日本の大手出版社や取次の各社は、失笑を禁じえませんでした。いくらアップルが世界有数の巨大企業といっても、日本におけるシェアは決して大きいわけではありません。インセンティブの提示と検閲によってアップルが日本のコンテンツを奪取し従えたいという本音が透けてしまったのです。

そのアップルの動向にいち早く対応したのは印刷業界です。彼等は電子書籍の発展そのものが印刷業界の死活問題につながりますから、黙っ

てみているわけにはいきません。早速、大日本印刷と凸版印刷が iPa
d 発売の二ヶ月後の二〇一〇年の七月に、二社共同で『電子出版制作・
流通協議会』を発足させます。そしてその後も多くの出版社が電子機器
業界と手を組みながら船を出し、独自に電子書籍化の航路を進み始めよ
うとしています。

電子書籍ブームのその陰にはつまり、出版社、取次会社、印刷会社と
いう三つの存在が横たわっています。

抵抗勢力といえば電子書籍推進派としては聞こえはいいのかもしれない
せん。しかし彼等も自分たちが築いてきた文化を守りたい一心であるこ
とを私たちは忘れてはいけません。

電子書籍業界はまさに複雑に絡み合った見えない糸で牽制しあってい

る、そんな状態なのです。

しかしそんな中、電子書籍ブームの中心地であるアメリカではGoogleがGoogle ebook storeという名で三〇〇万あるタイトルを引っ提げて電子書籍市場への参入を表明しました。その参入に筆者は驚きを隠すことができませんでした。それは世界有数の企業が名乗りを上げたということに対してではなく、その彼等の目指す思想に思わず心を奪われてしまったのです。

Googleはクラウドという外部サーバーを用意し、購入者がオンラインでPCで接続することによって電子書籍の購入と閲覧を可能するそんなシステムを発表しました。たしかにIT業界の雄として君臨するGoogleの電子書籍事業への参加は大きなインパクトであり、また

同時に電子書籍業界の将来性の大きさを物語るようにも見えなくもありません。

筆者が心を奪われたのは彼等の著作権に対する価値観でした。彼等が扱うものは有料の書籍もありますが、その大半はパブリックドメインといわれる著作権が消滅したものでした。Googleはパブリックドメインの電子書籍化を現在も推し進めているのです。英語圏に住むの多く人たちが無数にある無料の知的財産に触れることができることになりました。オープンソースの話とも重複しますが、合衆国アメリカはそういった知的財産そのものに対して私たちよりも進歩的な考えを持っていることに気付かされます。

アメリカが遙かに先を進んでいるなか、日本は大きく後れをとってし

まったなどという筆者はそのニュースを聞いたときに感じました。

文化を守ることに必死でいる一方で日本と英語圏の間でこうやって格差が広まる状況に私たちは一度目を向けねばならないのかもしれないのかもしれない。

電子書籍の発展は、このパブリックドメインの開放による知的財産の有効活用という観点からしても急務であると考えます。国家プロジェクトとして取り組むべき課題の一つとして考えて良いと感じます。なぜなら私たちの知が日本の発展に繋がり、教育が私たちの国を豊かにするからであり、それこそが国の発展のビジョンとして相応しいものだからです。

日本の電子書籍業界はどうなっていくのでしょうか。日本の電子書籍

業界は早く自分たちの力で現状を抜け出し、新しい航路を切り拓かなくてはならないのではないのでしょうか。

§ — e P u bとはどういうもの？ —

暗く重く憂鬱な話は一旦脇においておきましょう。これから電子書籍ブームにとって重要な欠かすことの出来ないタームの一つになっている、あるファイル形式についてお話したいと思います。

お気づきの方も多いでしょう。黒船と言われるアップル社の i P a d とともに知れ渡ったものの一つが e P u b というファイル形式でした。アップル社が次世代電子書籍用フォーマットとして正式採用したことで

日本でも脚光を浴びたのは記憶に新しく、今年の五月にePubは3.0にバージョンアップする予定で、縦書きや縦中横、ルビが使えるように仕様を変えながら私たちの関心を徐々に集めています。

そんな将来性の高いePubの大きな特長は、なんと言ってもリフロー機能でしょう。ePubは画面の大きさによってレイアウトを変え文章の上下が切れることなく読み進めることができます。これによってiPadのような大きな端末や、携帯電話やスマートフォンのような小さな端末でも自由自在にみられますし、文字の大きさも簡単に變更することが出来ます。iPadで電子書籍をご覧になった方は、文字の大きさなどレイアウトが簡単に变化する電子書籍の可能性に目を奪われた方は多いと思います。

ePubのリフロー機能がたしかにすばらしい機能である点であることは筆者は否定するつもりはありません。しかしePubにもPDFと同様に問題点がまったくないわけではないことを筆者はこれから示していければと思います。

§ — ePubの問題点 —

二〇一一年五月の3.0からようやく日本仕様の対応を開始すると申し上げましたが、現時点は縦書きに対応していません。また仕様が縦書きになるといっても、端末やソフト側で縦書きやルビ表示機能を装備するのは更に先のことです。端末側で縦書き表示機能を装備していないと

縦書きを読むこともできない、それが e P u b が持つ問題点です。

もしあなたが自分の持っている端末で縦書きは読めないと思ったらどう感じるでしょうか？ なぜ自分の端末は縦書きを読むことが出来ないのかと、あなたは電子書籍そのものに対する魅力を失ってしまうのではないのでしょうか？ 何万円もする端末を買い直すに値するほどにあなたは電子書籍を堪能したのでしょうか？

こう言い換えましょう。もしあなたが自分の電子書籍端末が他の端末より機能が劣ることを知ってしまったとき、漢字のふりがながルビではなく、カッコで閉じられている電子書籍だと気付いてしまったとき、その本の続きを読みたいと思うのでしょうか。その端末で読んだことを損したと考えるのではないのでしょうか。縦書きが出来ない。ルビを振ること

が出来ない、ePubはそういった足並みが揃っていない状態でスタートを切ってしまったのです。筆者は致命的であると考えています。

問題は他にもあります。それはePubを導入しようにもePubには専門性の高いスキルを必要とするという点です。

すでに多くの出版業界の方々がePubの導入を自発的に試みてきました。しかし導入をしようと試してみたが上手くいかないと諦めてしまった方も多いのではないのでしょうか？

epubはhtmlを元に作成されています。これらの知識はウェブ業界の知識であり出版業界には元来必要のない知識でした。

これまでindesignなど直感的な操作に慣れてきた編集者の中には直感的ではない、htmlやCSSの知識を必要とするePubを

扱うのは気後れを感じるのではないでしょうか？

そしてe P u bを選択する以上、e P u bが新たな仕様変更をする度に、そういった知識の獲得作業に追われるのです。編集者はITの人間ではありません。言葉のプロフェッショナルであり、活字表現のプロフェッショナルです。電子書籍が専門性を低下させる要因になるのであれば、電子書籍化は見送るしかない、そう考えている方も少なくないと筆者は感じます。つまりそれは出版業界が電子書籍業界に対して牙城を守る根拠にもなりかねないことを意味するのではないのでしょうか。

S — 日本で電子書籍が浸透しなかった理由 —

実は日本でもアメリカのように同じようなプラットフォーム方式の電子書籍端末の販売はこれまで何度も登場していました。kindleの採用するE—inkという電子ペーパー機能を持った端末は日本での発売が先です。しかしアメリカのkindleのように成功し浸透するには至りませんでした。

私たちはこの原因を明らかにしなければならぬと思います。そう今の電子書籍ブームが同じ轍を踏まないとも限らないのですから。

では違いの一つとして考えられる日本人とアメリカ人の本に対する考

え方について触れてみたいと思います。

電子書籍ブームの発端の地アメリカでは小説は読み捨てるものであるという考え方が主流であるということは皆様ご存じでしょうか。アメリカの方には読んだ本を本棚に戻すという観念があまりありません。夏休みに旅行先で読み、その場所においておくものです。聞こえは悪いですが読んで捨てるというのがあちらの方々では一般的なようです。ですから装幀も日本のように紙質やデザインなど凝っていません。

アメリカ人にとって本とは文字の集合であり情報データであると考えます。この考え方こそ、アメリカ人の本質を示すものであり *kin die* のような情報データだけをやりとりする電子書籍が浸透していった理

由だと考えられています。

一方の日本はどうでしょうか。考え方も状況も大きくアメリカと異なることに気付かされるはずです。

日本には惜しむという言葉や、もつたいないという言葉があるように物を大切にしてきた民族です。多くの日本人は本は読み捨てるものではなく、コレクションとしての魅力があることを知っています。作り手にも魅力的な装幀を施したり文字組にも気を配ったりとこだわりを感じさせるものが多く作られています。

ハードカバー、ペーパーバック
単行本、文庫本と二段階に分けて（あるいはどちらか一方で）売ると
いう手法は日本もアメリカも共通ですが、単行本、文庫本どちらも品質

的に日本の方が軍配があがることを否定する人はいないでしょう。たとえば文庫本、アメリカのペーパーバックは読み終えたときまるで扇子のように広がってしまい、また読もうという気にはなれません。しかし日本の文庫本はまずそんな考えが浮かぶことはまずありません。紙に上質のものを使用し耐久性を考えて作られているからです。つまりまた読みたいと思わせる、そんな思想の元に日本の書籍が作られていることに気がきます。ちなみにペーパーバックの紙は日本の漫画雑誌に使用されているものと相当すると言うと、うまく皆様にご理解いただけるのではないのでしょうか。

このように日本の編集、組版技術、そして印刷技術、装幀家たちのように本に関わる人たちの意識は完成されたものです。アメリカのもの

はまるで違います。

つまり本は私たち日本人にとって情報データではなく『本』なのです。手に触れ愛でることが出来る活字商品なのです。

ページを捲めくって文字を追ってみてください。どの本も文字の飛び込んでくる印象が優しく、インクの量やフォントにもこだわりが感じられますか。紙自体の質もよく、今の本は十年以上は持つようになっていんですね。筆者も古書店に行くたびに何年も昔の本が新品同様の姿で残っていることに驚かされます。

そういった日本の書籍のクオリティを知ってしまうと、なかなか電子書籍に移行したいとは思えません。日本人は一度品質の良いものに出会うとそれを手放せなくなる、そんな習性があります。

日本に電子書籍が浸透しなかった理由はこの日本の書籍の品質の高さにあつたのではないでしょうか。

では日本で電子書籍がこれからも流行らないのでしょうか。いえ筆者はそう考えません。日本の電子書籍市場は近い将来、今の紙の出版業界を超えるマーケットに育つ可能性を秘めているのです。

皆様はお気づきでしょうか。日本にもアメリカ同様にすでに電子書籍の文化があつたことを。

第三章 ケータイ小説とは

そう日本で最初電子書籍が脚光を浴びだしたのは、ケータイ小説というものです。そう日本にも電子書籍の灯は点いていたのでありkindleより何年も先にそれは始まっていたのです。

§ — ガラパゴス化は女性のニーズに合わせたモノ —

もったいぶるようで申し訳ありませんがケータイ小説についてお話する前に、その発展の土台となった携帯電話について話しておきたいと思います。つまり携帯電話がガラパゴスだと言われる理由について触れ

ておきたいのです。

これは『オタクで女の子のモノ作り』[※]（著 川口盛之助）という本に詳しいのですが、ガラパゴス化とも言える要因を作ったのは、まさしく独自の感性を日本の消費者でした。ウオッシュレットやパチンコ、またロボットたち数え上げればきりが無いほど、日本は日本にだけ通用する特殊な文化や製品を生み出し続けてきました。

なぜ日本で独自に発展するガラパゴス化が起こったのか、その答えとしてそれを求めたのが日本人だからと本書は記しています。ウオッシュレットは日本人の清潔志向にマッチしましたし、パチンコはがんじがらめになった賭博法の抜け道として黙認されてきました。

この日本の消費者が日本を独自に発展させてきた最も大きな要因であ

るといふのはむしろ当然なのです。（しかし現在の電子書籍ブームを見ていると当然のことのように思えなくなってしまうのですから時代は変化しているのかもしれない）

そして先程の著書では日本人の中で文化を形成する際、最も大きな力を持っているのが女性たちだと考えられています。社会に浸透するためにはまず女性達に認知されなければなりません。どんなに機能的に優れていても、男性にしか受けられないような硬派な製品は世間的に認知されないのです。こういった例はあえて、具体例は申し上げませんが、まいきよ枚挙に暇がいとまありません。

携帯電話がケータイ電話に名前が変化させたのも女性達でした。デコメールや赤外線通信、ケータイ小説、折りたたみ式携帯、カラフルな携

携帯電話が次々に誕生してましたが、それらは女性達の意見抜きにはありえなかつたでしょう。その熱は周辺のアクセサリーにも飛び火しました。ストラップやキーホルダーをたくさんつけた携帯電話を持って歩いている若い女性は今でも街を歩けば見ることが出来ますし、ビーズで装飾されたデコケータイなんてものも、今では見慣れた風景になっています。そう女性たちはカワイイものになりたいへん敏感なんです。日本の携帯電話市場のガラパゴス化は、ワンセグやおサイフケータイなど技術的な点としての要因もたしかに言われますが、こうして消費者のニーズ、そのなかでも若い女性達のニーズに答えていったことが原因だと筆者は考えます。

だから今でもケータイ電話は若い女性に人気があり携帯電話端末市場

の中心的な存在でありつづけています。

そしてケータイ電話が生み出したケータイ小説も、主に中学生や高校生の若い女性達の支持を受けて、市場を拡大していったのでした。

§ — ケータイ小説とは —

若い人に今でも人気のあるケータイ小説はほとんどが横書きで、空行が多いのが特長です。また内容でも恋愛を描いたものが中心で、一般人たちが読むには特殊なものが多く、中にはまったく受け付けない方もいらっしやるかもしれません。その意味ではケータイ小説はガラパゴス化した日本の中で、ガラパゴス携帯とともに独自の進化を遂げていった

ものであると思います。

筆者は、今後もこのケータイ電話の進化は止められないと考えています。むしろ女性達の声を取り入れながらケータイ電話のままですらなる進化を遂げていくように感じられます。ちなみに筆者は当初ワンセグやお財布ケータイ機能がついていないため苦戦するだろうと言われていたにもかかわらず iPhone が日本でも飛ぶように売れたのは女性に支持されそうなフォルム形をしていたことが原因の一つにある思っております。筆者は女性で iPhone 以外のスマートフォンを使用している女性はまだ見たことがありません。彼女たちは流行やかわいらしさに敏感であるにも関わらず iPhone 以外のスマートフォンには興味を示さずうとしていません。

できれば携帯電話メーカーの方々には、このことを考えていただきたいですね。いろいろな携帯電話やスマートフォンが発売されていますが、今までどういう端末が売れたのか観察されてはいかがでしょうか。かならず『かわいらしさ』や『女性』がキーワードになっているはずなのですから。

『オタクで女の子のモノ作り』川口盛之助著……トイレの音姫や萌えブームなどからモノ作りや日本独自の文化の謎を解き明かしていく痛快な日本文化論。

日本の電子書籍は日本的でなくてはなりません。つまりケータイ小説から多くのことを学ばなければなりません。つまり電子書籍はケータイ電話やスマートフォンで読めることが重要であるという点です。この基本を忘れてしまつては電子書籍の発展はないと筆者は信じています。最初に申し上げたように日本人が本を読むにはiPadやKindleは大きすぎです。まるでアメリカ車のようでありませんか。あれが大和撫子たる日本の女性が持ちたいという大きさなのでしょうか？ せいぜい電子書籍端末は文庫本ぐらいの大きさまでではないでしょうか。

そして日本人はお財布ケータイ、ワンセグ、赤外線中心と機能がたく

さんある幕の内弁当のような製品が今でも好きです。携帯電話は電子書籍も組み込んでいくに違いありません。

また携帯電話には、電子書籍端末にはない魅力が秘められているのです。それはプライベート性です。携帯電話は多機能故に、外部から何をしているのか分からないのが特長です。メールを打っていたり、インターネットを見たり、ゲームを見たりテレビをみているかは画面の中を覗かなければ分かりません。簡単にプライベート空間を作ることが出来ます。これが秘密が好きな女性達に受けた理由ではないではないでしょうか。いちおう筆者はここでスマートフォンにもあまり知られていない使用方法があることをこつそりとお教えします。まああまり大きな声で言うことでもないのですが。たとえば携帯電話を仕事に取り出すと、

周りから私用かサボりかと思われるのが普通ではないでしょうか。だから仕事中に携帯電話を使っている人はあまりいませんね。でもスマートフォンは違うんです。仕事に取り出しても調べ物をしているのだと思わせることができます。

電子書籍を読むことはやがてケータイ電話のツールの一つとして人々に浸透していくでしょう。

つまり日本の電子小説がケータイ小説から進化していくことというのはこういったことが本質にあるからであり、その汽船路を辿っていくことこそが電子書籍業界が進むべき航路のです。

§ — ケータイ小説は小説？ —

ケータイ小説は小説ではない。

こんな声を耳にしたことのある人は多いのではないのでしょうか。

ケータイ小説を参考にしてどうするのだと。

たしかにケータイ小説は、その独特のスタイルからずっと小説とは受け入れられているとは言えない状況が今も続いています。

空行が多くて読みやすいという言葉が、中身がない小説と簡単に置き換えられてしまった感があります。小説をよく読み深く理解している方ほどケータイ小説にたいして抵抗感を示す方が多いのかもしれませんが。

書籍化し百万部以上売れた作品でさえもかの文芸業界で認められてい
るとは言えませんし、大手の新聞の書評に載ったこともかつてなく、反対
に文化の破壊の象徴として批判されてしまうほどでした。

§ 一 ケータイ小説の問題と原因 一

なぜケータイ小説は認められなかったのでしょうか？ 似て非なる業
界であることが主たる原因に違いないのですが、それだけではないよう
に感じます。

アマチュアの拙くて若い書き手が多いからでしょうか？

いいえ、金銭のやりとりをしている以上彼女等もプロです。そして多くの読者を持つタレント性と技能を持った方達なのです。

内容が特殊だからでしょうか？

いいえ、根強いファンの存在に私たちは着目すべきだと筆者は考えます。読者の規模で言うならばケータイ小説は文芸業界を匹敵する程までに成熟していると言えるのではないのでしょうか。

ケータイ小説は空行が多いからでしょうか？

そうケータイ小説を揶揄したり、特長として数え上げられたことの一つにその一文ごとに表示される空行がありました。ケータイ小説には改行や段落はなく一文一文が独立して表示されるのです。それらは今までの小説に慣れ親しんだ人にはたいへん奇妙に映ったのです。小説ではな

いと、批判の矛先となったのがこの空行の多さだったのです。

でも携帯の機能故の問題であると指摘した人はほとんどいません。解像度の問題、携帯電話の性能の問題といったことにほとんどの方は目を背けてきたのではないでしょうか。

ケータイ小説が広まりはじめた二〇〇〇年初めの頃の携帯電話は縦横の一边の解像度は一〇〇ピクセルもないものばかりでした。解像度で言えば今のiPhone 4の十分の一程しかありませんでした。処理速度も今とは雲泥の差でした。そんな時代に産声を上げたケータイ小説が日本の書籍と同等のクオリティを求めるのは無理だったのです。

小さな文字を表現できなかつたため文字が大きくなります。また携帯メールを使っていると分かると思うのですが、その入力テンプレートに

は行間というものがありませんでした。解像度が低いために文字を大きく表記するしかなく、かといって文章をつくるにはある程度の文字数が画面上にあらわれている必要がありますから文字を詰めるしかなかったのです。そんな状態で文章を書いても表示すると文字が詰まって圧迫感を感じてしまうことがほとんどでした。それを解消するためには独自に改行キーを押して空行を入れるしかありませんでした。

そもそも読みやすさは本来小説が求める美德であり、嘲笑されるようなモノではありません。むしろそのような状態でありながら、独自の文化を作ってきた熱意に胸を打たれます。

特殊な恋愛物の内容も、ケータイ電話がそれほど浸透していない時期に、新しいモノに敏感で抵抗感の少ない若い女性読者を対象にしたから

こそあのような小説ジャンルが生まれたのです。それでは駄目なので
しょうか？　いいえそんなことはないはずです。児童文学も純文学も推
理小説もSF小説も、ターゲットを指定したジャンルであり、ジャンル
が成立していると言うことはマーケットとしての土台が完成していると
いうことです。これは彼女らの功績に違いないのです。

この功績を称えずに電子書籍を浸透させようとしても、筆者は同じこ
とを繰り返すだけのよう思うのです。このままではきっと電子書籍も
またケータイ小説が文化破壊の象徴として批判の対象になったように同
じような状況が生み出されるのではないでしょうか。冒頭で筆者が述べ
た電子書籍に対する批判がその萌芽にならないとは限らないのです。

最初の指摘に触れますが今の携帯電話には初期の頃のような解像度の

問題や処理速度の問題はほぼなくなりました。昨年から急速にスマートフォンが発売されるようになり、追うようにケータイ電話そのものも機能や性能を飛躍的に進化させてきています。

ケータイ小説から進化するチャンスはあるのだとしたら今ではないでしょうか。その進化の鍵を握り、そのボタンを押すものがiNovelなのです。

いくら電子書籍がケータイ小説から出発しようといっても、女性に人気がある携帯電話とスマートフォンは違いますよね。

ユーザー層も異なりますし、その基本的な機能も違います。同一の物として考えてはいけません。それを理解せずにケータイ小説そのものを電子書籍化したところで何の意味もありませんから。

携帯電話とスマートフォンとの違いについて明らかにしておきましょう。大きな違いはスマートフォンがああ小さな端末であるにも関わらずパソコンのように扱えるということでしょう。

そしてインターネットを見ることができるといいうことです。皆さんも

ご存じの通り携帯電話でもインターネットを見ることができません。しかしスマートフォンは最初からインターネット利用をコンセプトとして設計されていて、タッチパネルやまたオンラインに接続を前提としたアプリなど様々な機能が開発されているように拡張性そのものがスマートフォンの魅力の一つとして数え上げられているのです。

さて外出先や出張先など移動ながらもパソコンを使える、そんなユーザに向けて開発された高機能なスマートフォンは、働き盛りのビジネスマンならば有効に使える機能だとは思いますが、パソコンにブログやSNSやメールなどのコミュニケーション機能に価値を置いている中高生の若い女性たちにとっては過剰な機能なのかもしれません。若い女性にはもっぱらコミュニケーションの機能として携帯を利用します。

またスマートフォンがインターネットへ接続するために接続料金を必要とすることはお小遣いを親からもらう若い女性達への普及に一旦歯止めを掛けてしまう要因になってくるでしょう。

ようやくスマートフォンが若い女性たちの支持とは別の思想によって設計されていることに気付きます。そう、スマートフォンを利用する多くは主に男性で大人達です。インテリジェンスがあり、知的好奇心が豊富で競争心が強いという印象を受けます。就活生の二人に一人はスマートフォンを持っていてと言われており、スマートフォンは現代社会を生き抜く上で欠かすことのできないツールのようになるうとしています。

また十年前ケータイ小説の読者だった女の子たちは、今は主婦や社会の働き手となって活躍しています。彼女らの手にはやはり今もケータイ

電話が握り締められているのではないのでしょうか。では彼女らは今も昔のケータイ小説を求めるのでしょうか？ いえ彼女らも嗜好は変化しているはずですよ。

大人に限らず子供一人一人が携帯電話を持つ時代になりました。

i N o v e l が追求して行くべき道はどちらなのでしょう？

ケータイ小説なのでしょうか。まったく違う新しい道なのでしょうか。

i N o v e l が追求した物は後者でした。

スマートフォンが目指したものは大人に受ける端末でした。i N O V

e l が目指すものも、大人の電子小説ということになります。

§ 1 大人の小説とは？

ここで筆者が言う大人の電子小説というのは、たんにライトノベルやケータイ小説を排した大衆小説や純文学のような硬派なものではありません。

小説には様々なジャンルがあります。ミステリや恋愛小説、文学作品、海外小説、ジュブナイル、また古くはSFなど多くのジャンルが誕生して面白さを競い合っています。

iNovelがいう大人の小説とはつまり若い女性だけをターゲットとしたケータイ小説のように特定のユーザーを対象にするのではなく、様々なジャンルに対応出来なくてはならないものであるということ

でした。

年若い娘が結婚して子供を産んで嗜好が変わっても同じスタイルで本を読み続けることができる。そう娘や息子に慕われる父や母のような包容力のある存在。それこそが読書の本当の魅力です。

そして筆者が電子の大人の小説として着目したのが紙の本、つまり街の書店や図書館に並べられている書籍なのです。本屋に売られている書籍はジャンルを選びません。どのような内容も本に飲み込んでしまう包容力があります。

ケータイ電話が幕の内弁当のように様々な機能を求めたように、スマートフォンがさらにパソコンの機能を求めたように、そしてiNoveは紙を手本として様々なジャンルを包括する大人の小説を追求し

よう。そこに i N o v e l の精神があります。

§ — 活字がもたらした信頼 —

紙の本がこれまで培ってきたもの、それは信頼です。しかし本の信頼は最初からあったものではありません。言うまでもなく著者や編集者、印刷所の人たちなど多くの人たちが過去から積み上げてきたものです。それだけではありません。書評家やフォントを作った人、装幀家など多くの人たちが関わって支えてきたものでした。

筆者が古書店に行ったときのことですが数十年前に製本された本をみ

ると行間と字間が同じ幅で、読むのに難儀することがありました。どうしてこんなに読みにくいのだろうか、お恥ずかしい話ですが、そう思いながら買うのを諦めたことがあります。しかし今では古い書籍でも復刻版が次々に発刊され、そういう本に出会うことはほとんどなくなりつつあります。活版技術が十一世紀からつづく技術ではありませんが、この数十年の間にもDTP化によってさらに格段の進歩があったのだらうと思わずにはいられませんでした。

私たちは新聞や雑誌、本にインクで記されている文字のことを活字と読んでいます。活版印刷は今となっては失われた技術です。ついこの前までは金属の文字の型を一つ一つ配置し、それを転写し印刷の版をつくるという単純なものでした。一つ一つの文字は一つ一つの金型が作って

いたのです。その金型を組み合わせて記事をつくっていったのでした。文字の大きさが変わればまた金型を変えなくてはいけない、神経質で根気のいる作業だったのです。

活字によって記された文字は紙の上を移動することはありません。一枚の紙の同じ場所に1ミリも動くことなく留まり続けます。活版印刷から方式が変わってもこれは変わりません。だからというわけではないですが、活字はやり直しがききません。一つミスが起これば全てがやり直しです。やり直しがきかない。失敗の許されない世界には魂が宿ります。プロの作家や記者はそのことを知り一筆一筆に魂を込めていったのではないかとつい夢想してしまいます。

今、活字は紙から私たちの家にあるディスプレイや携帯電話に映し出

されるオンラインのウェブニュースに置き変わろうとしています。電子ペーパーの出現が今か今かと近付き、紙本来の意味すら失われようとしているように感じられます。

ディスプレイ上では書いたり消したり、文字を移動したりすることが自由に行うことが出来ます。不祥事があると企業サイトの記事が削除されたりということが当たり前のように行われています。そんな現状なのか、オンラインの世界がいまもつとも必要としているものはなんなのでしょうか？ つまりそれは情報に対する信頼なのではないでしょうか？

iNovelが目指すものはこれまで述べてきたとおり単なる情報はありません。それは本の中に脈打つ活字です。iNovelの小説が電子小説でありながらPDF形式なのは、もしかしたらその活字の精神

を受け継ぎたいからなのかもしれません。

§ — i N o v e l の思想 —

i N o v e l は携帯電話やスマートフォン端末を、一枚の紙だと捉えます。先人の技術や伝統の精神を引き継ぎ、この小さな紙にどのように美しく、そして効率的に文字を配列できるかを考え文字を並べていきます。それが単純ではありませんが最初の方で申し上げた三つのコンセプトです。上下左右の余白を削り、可読出来るぎりぎりまで文字を大きくし、かつどれだけ多くの情報量を載せられるか。このコンセプトによって i N o v e l は、まるで本のように、どのような作品でも調和し合う

ものになりました。当初は電子書籍ですからまったく本とは違うものができるのではないかと想像したのですが、それでもやはり本のレイアウトに近付いていくことが不思議にも感じられるのでした。

ここに作者の言葉を載せることで*iNovel*の精神は完遂されるのだと筆者は考えております。

以上*iNovel*の内側の部分を説明させていただきました。次章より、*iNovel*のより具体的な姿について述べていきたいと思います。

第四章 スマートフォン用の電子小説とは？

I 小さな画面で読みやすいこと

i N o v e lの大事な点は、小型端末の小さな画面で読みやすくすることです。ポイントは最初の方にも三つご説明しましたが、縦型の判型をつかい上下左右の余白を少なくすること、画面サイズに合わせて文字の大きさを調整することです。このバランスが崩れてしまうと i N o v e lの本質は失われてしまいます。

このとき筆者が参考にしたのは i P h o n e 3 G Sで使われている文字のサイズでした。

ここで着目すべき点は、端末によって解像度の差はありますがどれも似たような画面サイズをしているということだと思います。これは単純なようですがiNovelを設計する上で大事なポイントだったように思います。もしスマートフォンがの大きさがどれもばらばらとしたら、iNovelそのものが成立しなかったかもしれません。PDFファイルで電子書籍を作ろうとは考えなかったと思います。

携帯電話がこの二〇年近くずっとその大きさを変えていないことを発見したときはこれを書いているこの瞬間です。おそらく人間工学的に携帯電話のこれ以上の進化はもうないのかもしれないかもしれません。

Ⅱ 縦型画面であること

携帯電話は縦に細長い形状をしています。つまり横書きよりも縦書き表記にするメリットが増したことになります。人間が読みやすいと感じる一行の文字数は三〇文字から四〇文字であるとされているのですが、iNovelは縦書きにすることで端末を横に傾けることなく三〇文字以上を達成することが出来ました。

これによって持ち方を変える手間がなくなり上下を固定すれば、ページを左右に移動するだけなので、操作性に優れるようになりました。

ちなみにスマートフォンは携帯電話と比べると画面が少し横に広く作られています。その画面はほぼA4や四六判の縦横比に近付いて設計さ

れていることに私たちは気付きます。

Ⅲ ノンブルの位置

小型端末ですから見開き表示をする必要がありません。ですのでノンブル（ページ数）は左右どちらかに配置するのではなく、中央に配置してあります。

Ⅳ 表紙の観念

そしてスマートフォンで読むということは表紙という観念もありません。

ん（しかし扉という観念はありますが）。PDFファイルを途中で読み始める場合は、しおり機能で読み掛けていたページが現れることがほとんどだと思えます。つまり表紙を見る機会は少なくなります。そうするとどんなタイトルの小説か忘れてしまう場合があるのではないかと筆者は考えました。それを防ぐためにどのページにもタイトルと著者名を記すようにいたしました。

V データの軽量化

iNovelはレイアウト以外に、データ容量の軽量化にも徹底的にこだわって作成しています。いくら携帯電話やスマートフォンが高性能

になったとはいえ、ファイルが重く端末に負担を掛けるようではいけません。機種によつてはPDFファイルに対して容量制限がしてある場合があります。iNovelはどれだけページ数が増えても2MB以下に抑えて設計されています。レイアウトを平準化し、この軽量化によつて読者のコレクション欲を高めることができると筆者は考えます。

iNovelはデータを使用する装飾的なものや画像データは限りなく少なくし、全ページモノクロにしてあります。またフォントそのものがデータを増大させる一つ要素となっていますから、使用するフォントの種類も出来る限り少なくしました。

VI 印刷時のこと

i N o v e l は印刷も可能なメディアを目指しています。なぜならば i N o v e l は個人としての利用ではなく、家族に楽しんでもらうことを目的とするホームユースを目指しているからです。携帯電話を持っていなかったり、P C を持っていなかったら、i N o v e l は印刷という方法によってその夢を実現することが出来ます。i N o v e l の電子書籍は、文庫サイズの紙に若干上下左右の余白をとりながら中央に配置して出力すると、もつとも見栄えのする状態になり、文字も大きめに出力され目の悪い人にも重宝されるでしょう。やはりこの場合においても印刷コスト的に、もつとも負担の少ないモノクロ出力に対応出来る全ペー

ジモノクロが望ましい姿であると考えました。

VII 小説らしさ

そして最後に小説に近付けるといふ意味でフォントは明朝体を標準にして小説の雰囲気を出すように努めてあります。

§ 一 縦書きの中にある独特のリズム 一

そうして紙の本を意識し追求した結果、今まで携帯電話では読みにくかったPDFファイルはこれまでのPDFファイル文書と違って普通に

読めるようになりました。そしてスマートフォンで読む電子小説の魅力に気付いていくこととなるのです。

それはスマートフォンで読む縦書きの読みやすさでした。

日本人が最も読みやすいと感じているのは縦書きではないでしょうか。新聞や雑誌、漫画、あらゆる場所で日本語は縦書きで書かれています。これは単なる習慣ではありません。日本語の、いえ日本人が持つ性質と考えるべきだと筆者は考えます。日本語は横書きで表現することも可能です。しかし長い文章でなにかを伝えたいときには、手紙をしたためるときのように文章は縦書きになってしまっているのではないのでしょうか。

日本語の縦書きの文章からは、ひらがなと漢字を融合した流れるような独特のリズムが生まれます。活字がまるで時間軸に沿った一本の糸の

ように音源となつて読者の耳に響いていきます。

カエデブックスの iNovel は一ページあたり三十一文字×十一行、だいたい一ページ三百字前後が理想的であると判断し採用しています。それだけの文字数がおそらく解像度的にも適性であると考えておりますし、また短期記憶として頭の中に入る情報量は数十秒とのことで、つまり画面記憶が有効なぎりぎりの情報量ではないかと考えています。人間工学的に、ほぼシームレスに読み進めることを実現したものがスマートフォン用の電子小説 iNovel なのです。

このスマートフォンで縦書きで味わう読書体験、いえ、この感動は他のものではない表せません。筆者自身、単行本や文庫本よりも読みやすい

と感じます。視点が固定され、ほとんど視線を動かす必要がなくなったために、瞬時に、そして隅々まで、文章を追うことができるようになりました。まるで速読をしているような感覚を味わえるのは気のせいではありません。

iNovel が採用するPDFファイル形式は、このように必ず縦書きで読むことが出来ることが特長です。ふりがなが振られていれば必ずルビをつけることが出来ます。PDFファイルですから紙と同じように表現することが出来ます。

日本語の魅力を最大限に引き出すにはやはり縦書きでなくてなりません。小説家の立場で考えてみてください。縦書きで読まれたり、横書きで読まれたりばらばらで読まれることは、小説家にとって本望と言える

でしょうか？ 筆者はどのような端末でも同じように読んでもらえる i
Novelこそ、著作者の要求に応えるものだと固く信じているのです。
そして、ようやくみなさまとともに最初のどうしてPDFを選んだの
かという疑問に立ち返ることができるようになりました。 iNovel
にとってPDFファイル以外のフォーマットというものは考えられな
かった、それがPDFファイルを採用した答えでした。

さてPDFファイルについても一度おさらいしておきましょう。

PDFはもともと印刷業界の入稿ファイルとして採用されているほど信頼の置ける規格です。ISO3000を取得しているのでファイル形式が今後無くなるという心配がありませんし、すでにPCや携帯電話、スマートフォンと多くの機器で採用されていますから端末を選ぶ必要がありません。大きな特長はレイアウトを保持することができることで、PDFが読める端末ならどれでも同じ体裁で同じ内容を読むことができます。レイアウトが固定されているので端末を変えても、読むリズムが狂うという心配はありません。そしてPDFファイルのもう一つのメ

リットは、ファイル自体にセキュリティ設定が可能なことであります。編集、改変、印刷などを防止することが出来ます。ちなみにePubの仕様にはその機能は付いていません、これもまたePubにはない機能の一つとして留めておくべきでしょう。

※PDF……Portable Document Format（直訳すると携帯性文書規格）アドビシステムズが一九九三年に開発した電子書籍フォーマット。Windows95よりも前に発売されている。

第五章 i N o v e l の名前について

§ — なぜ名称をスマートフォン小説としなかったのか？ —

最後に余談ですがブランド名をスマートフォン小説としなかったことについてご説明したいと思います。

当初は筆者は i N o v e l ではなくスマートフォン用小説と読んでいました。

しかし携帯電話自身も進化を続けており、解像度が上がり P D F を読める端末が増えていることもあり、i N o v e l がスマートフォンでしか読めないと認識されてはいけないと気付きます。これでは多くの端末

でPDFファイルフォーマットが採用されているという意味を主張出来なくなりそうです。スマートフォン以外にも、PCや携帯電話、PDFファイルフォーマットを採用している電子書籍端末なら、どの端末でも読むことができる、それがiNovelの特長なのですから。

PCのように快適につかえるスマートフォンですが、それが当たり前前のようになってきたとき、おそらくスマートフォンという言葉はなくなってしまうのではないかと考えました。携帯電話という言葉に吸収されていくのではないかと。

ケータイ小説でもなく、電子書籍でもなく、独自の進化を遂げていてほしい、そういう想いを込めてiNovelという名称をつけたのでした。

S — i N o v e l という名前の意味 —

では i N o v e l という名前の意味をお伝えして、この記事の終わりとしたいと思います。

i N o v e l の意味ですが、『i N o v e l』の右側の『n o v e l』の方にはもちろん《小説》という意味が含まれています。問題は『i』の頭文字の部分だと思えます。勘のいい方ならすでにお気づきだと思いますが、『i』には《i n t e r n e t》の意味があります。アップルが最初の i シリーズである i M A C と名付けた理由は、《i n t e r n e t》にすぐに繋がられるパソコンであるというコンセプトを表すためだ

と聞いておられます。それと同じように iNove1 はインターネット抜きには考えられません。

でも『i』の意味はこれだけではありません。『i』にはもう一つの大きな意味がありました。それは虚数 (imaginary number) の中にある虚 (imaginary) という意味です。日本語で『想像』ともいうのでしょうか。

直訳すると iNove1 とは《想像の小説》という意味です。おかしいと思われた方はいらつしやるでしょうね。小説はそもそも嘘付きの商売といえますか、Fiction^虚と称されるものなのですからこれでは二重定義になってしまいます。ですが電子小説という実体^{カタチ}のない『i』という存在の電子書籍を、実体^{カタチ}ある紙の本に近付けたいとい

う思いをこの i N o v e l という言葉の中に含ませることができる
面白いのではないかと思っています。限りなく紙の本に近い存在の、
紙では得られなかった i N o v e l の読書体験を、より多くの人たち
に味わっていただけたらという想いを込めて。

この文章は二〇一一年一月にまとめたものです。電子書籍業界は日々進歩を遂げており、内容にそぐわない箇所もあると思いますが筆者個人の主観としてご容赦いただければと思っております。また本内容が特定の団体を貶めたり中傷したりする意図はないことを、改めて皆様にはご理解いただきたく存じます。

やがて多くの人にこの i N o v e l の名前が知られ、携帯電話やスマートフォンで i N o v e l を当たり前のように読む時代がくるだろうと筆者は想像します。そうなったときそれはケータイ小説の進化でも電子書籍の進化でもなく、本としての進化にあたるのかもしれない。

感想をお寄せください。

本書『iNovel の衝撃』に対するご意見
もしくは電子書籍に対するご意見など、
伺えましたら心より嬉しく思っております。
カエデブックスサイトにて皆様のご意見を
掲載させていただく予定です。

宛先

inovel@kaedebooks.com

iNovel アイノベル

2011年に筆者谷口純一がPDFタイプの電子書籍を普及するために考案した電子書籍方式。PDFファイルを使用し、スマートフォンに合わせたレイアウトを行い、オープンソースのように誰でも名乗ることができることが特長。なお筆者は未経験から出版社を設立した経緯を持ち、松浦儀実著の『神様がくれた背番号』を発行し、出版業界、オンライン小説に対し問題提起を発し続けている。

iNovel という衝撃

電子書籍登録日 2011年2月1日

iNovel



kaedebooks.com

カエデブックス

筆者 谷口 純一

電子書籍化 楓出版株式会社
<http://kaedebooks.com>

《作成No.0018》

※スマートフォン用の電子書籍として作成しました。



Kaedebooks.com

カエデブックス

カエデブックスは電子書籍の明日を考えます。



iNovel

*iNovel*とはスマートフォン
や携帯電話で読みやすくレイ
アウトされたPDFファイル小
説の総称です。

